甲州街道

モデルコース⑤
ブドウ畑と水が織りなす歴史と文化的景観があふれる勝沼宿コース

勝沼宿は甲府盆地の東の玄関口として発展しました。往時は多くの旅人が訪れ、特産のブドウや加工品の販売などで大変賑わい、荻生徂徠（おぎゅうそらい）は『峡中紀行（きょうちゅうきこう）』に「人家多く繁盛なるところ甲州街道で一番也」と記したほどです。峡東一帯に大きな被害をもたらした明治40年の大水害では、河岸段丘上の水田が流され、畑地が復活し、商品作物として有望なブドウ栽培が始まる契機となりました。ワイン醸造の発達や鉄道の開通、観光農園の展開など、様々な要素が重なり合い、勝沼宿はブドウとワインの町として発展していきます。大善寺の辺りから甲州街道に沿って西に進むと、歴史的建造物に隣接し、奥深く広がるブドウ畑などの往時の風景や、沿道の観光農園の賑わいを楽しむことができます。南側の日川の方向に目を向けると、まさに勝沼の歴史と文化を支えてきたことを誇示するかのように、ブドウ畑が一面に広がる圧倒的な景観を望むことになるでしょう。

勝沼宿（かつぬま）

甲州街道、甲斐国19番目の宿場。1618（元和4）年に甲州街道の新規宿駅として発足し、甲府盆地の東の玄関口として発展してきました。
往時の勝沼宿の姿を、荻生徂徠は『峡中紀行』で「人家多く繁盛なるところ甲州街道で一番也」と記しています。また、ブドウで栄える勝沼宿をみて松木珪琳（まつきけいりん）が「勝沼や馬子もぶどうを食いながら」の句を残すほど、江戸時代からよく知られていた宿場町でした。

旧田中銀行博物館

明治30年代初めに勝沼郵便電信局舎として建てられた入母屋造りの瀟洒な洋風建築です。建築した松木輝殿（てるしげ）は勝沼の人主で西洋建築と日本建築を融合させた「藤村式建築」を多く手がけた大工棟梁で、主に学校建築に携わりました。
社屋の中には郵便局時代のカウンター跡や、銀行時代の椅子や机が当時のまま残っています。また、鬼瓦の屋根に洋風の引き上げ窓を組み合わせたり、「田」「中」の文字がデザインされた洋風の鉄柵など、和洋折衷のユニークな意匠も数多く見ることができます。

祝橋（いわいばし）

1913（大正2）年に中央線の勝沼駅（現・勝沼ぶどう郷駅）が新設された翌年、旧祝村の集落から日川対岸にある勝沼駅にブドウを出荷するために作られた橋です。この橋ができたことによって、それまで馬車で1～3日かかっていたブドウの輸送時間を4時間に短縮できたといいます。
その独特の形から「眼鏡橋」の愛称を持ち、勝沼のシンボルとして広く親しまれています。橋の上からは日川や勝沼特有の地形を俯瞰して見ることができます。

日川（にっかわ）／日川水制（ひかわすいせい）

日川は大菩薩峠を水源として勝沼の中心を流れ、笛吹川に合流する急勾配の河川です。
明治40年代に大雨が降り、勝沼を含む峡東地域一帯に大きな被害を生みました。この大水害をきっかけに施工されたのが日川水制です。「水制」とは、川を流れる水の浸食作用などから河岸や堤防を守るために流れる方向を変えたり、勢いを弱くすることを目的としたものです。
日川水制は水の流れを一定にするため、流れに対して直角に構築され、3kmの間に74基の水制が埋められました。当初の姿を見ることはできませんが、日川の両岸にあるブドウ畑では、畑の中に石を敷いたような水制の一部が見られます。

宮光園（みやこうえん）

日本のワイン産業の先駆者、宮崎光太郎（みやざきこうたろう）が創業した宮崎葡萄酒醸造場と観光葡萄園の総称です。
現在は、日本のワイン醸造のルーツを知ることができる市営の資料館として整備されており、当時のワイン醸造や皇族の来訪の様子が分かる貴重な写真や、観光葡萄園に関する数多くの資料などを展示しています。貴重な映像資料や、当時のワインラベルなども見ることができます。

勝沼富町（とみちょう）の甲州ブドウ

勝沼富町のブドウ農園「中央園」にある古いブドウの巨木で、甲州種の原種に当たり、別名「甲龍」とも呼ばれています。通常、ブドウの木は根に養分を吸う虫が付くと、木が衰弱して寿命が短くなり、20年ほどで樹勢が衰えるといわれています。そのため現在は虫が養分を吸えなくするため、特別な種類のブドウを根の部分に使う「台木」という接ぎ木技術を使って苗を作り、栽培しています。
この勝沼富町のブドウは台木技術を導入する前の大正時代に植えられたものですが、樹齢が100年以上経った今も、幾多の自然災害を乗り越えて見事なブドウをたわわに実らせています。

葡萄酒（ワイン）

旧勝沼町では、親しみを込めてワインは「葡萄酒」と呼ばれています。明治10年に勝沼のブドウを生かしたワインを醸造するため、同年に設立した葡萄酒会社により高野正誠（たかのまさなり）と土屋龍憲（つちやりゅうけん）がフランスへ留学しました。彼らがブドウ栽培や醸造技術について学んだ知識を持ち帰ったことにより本格的なワイン造りが開始しました。1899（明治32）年に水害の影響で勝沼のブドウが不作になった際は、地元のワイナリーがブドウを買い上げ、そのお礼として栽培者は冠婚葬祭などで積極的にワインを飲もうという「葡萄酒愛飲運動」が起こりました。そこから勝沼では日本酒の代わりとして、また地産地消の意識の元で、一升瓶ワインを晩酌や宴席で飲む習慣が育ち、昭和の頃は、一升瓶からワインを湯のみ茶碗に注いで飲むのが日常的な光景だったといいます。

大善寺

奈良時代の718（養老2）年に当時の名僧、行基が開いた寺です。手にブドウを持った薬師如来が現れ、木像を刻んで開かれたと伝えられます。行基がその後発見し、薬草として育てた木が「甲州ブドウ」となったという伝説もあります。寺では古くから境内でブドウを栽培しており、ワインも醸造することから「ぶどう寺」の名でも親しまれています。
薬師堂には左手にブドウを持つ珍しい薬師如来像が祀られ、5年に1度開帳されます。この薬師堂は平安時代の1286（弘安9）年に建てられた県内最古の木造建築物で、国宝に指定されています。